

俳句で鍛える、ものづくり

(株)アルティスタ人材開発研究所 代表 玄間 千映子

ものづくりの標語を、俳句で作ろうというのではない。道なき道を進む開発や、ものづくりの速度を上げるのに、俳句というツールを使って見たらどうかというのが今回のお題だ。

たとえば、「ガリガリ君」という冷菓がある。あの「ガリガリ」という食感、ソーダ味の水を凍らせるのではなく、純水に後からシロップを混ぜることで生まれるのだそうだ。きつとこの製品開発者は、まず製品の最終イメージに「ガリガリ」という食感を描き、そのガリガリを再現する手段として、普通の水に比べ硬くて比重も重い「純水」が脳裏に浮かび、純水にシロップがけという製法にたどり着いたのだと思う。商品名に擬音・擬態語「ガリガリ」を冠しているのは、「ガリガリ君」はそういうスキームで生まれたのではと思うが、

いう特性を備えている。

課題は、擬音・擬態語の語彙数だ。重さ、硬さ、鋭さの他にも光や照り、湿度や温度、触感、音、臭いなどさまざまな自然現象を映す擬音・擬態語は、現代の人工化した暮らしの中では、潤沢にその語彙を増やすのは難しい。しかし語彙数は、思考活動の深さと直結する。なんとしても擬音・擬態語を増やしたいところだが、それには俳句が役立つのではないかと考えた。

「古池や蛙飛び込む水の音」という芭蕉の句がある。この水の音を考えてみよう。「ポチャン」という擬音・擬態の語が、無理なく浮かぶと思う。自然を映す季語が存在する俳句を媒介にすれば、蛙が飛び込んだ時、どんな音を立てたかなどと、自然空間の中での出来事を疑似的にイメージすることが容易になる。そうなれば、擬音・擬態語の語彙を増やす敷居もグッと低くなるというものだ。

英語には「ガリガリ」に相応する擬音・擬態語はなさそうだ。デジタル時代は速さが勝負だ。それなら

時間のかかる理論よりも、直感を鍛えたらどうか。まず直感で最終ゴールのイメージを描いてしまい、具現化の手段は緻密に理論で仕立てる。それには擬音・擬態語の語彙を増やすことが必須で、その手段に俳句がもたらす疑似体験は有効と言えそうだ。

「ガリガリ君」は、日本だからこそ、生まれたと言えるかもしれない。

【筆者紹介】

玄間千映子 (げんま・ちえこ)



(株)アルティスタ人材開発研究所代表。國學院大學卒。米インマヌエル大学大学院卒後、米スタンフォード大学ビジネススクール修了。現在、信州大学のコーディネーター兼技術アドバイザー他、団体役員などを併任。著書に『朗働の時代』『ジョブ・ディストラクション 一問一答』『リストラ無用の会社革命』など。

